

(研究部門 国語)

**『主体的 対話的に学ぶ子どもの育成』**  
**—語彙を豊かにし、読み取る力の向上を目指して—**

大阪市立淀川小学校

## 1. 研究主題設定の理由

学習指導要領の改訂の基本方針の一つに『「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進」が示された。これを受け、本校教員が授業改善を意識して日々の実践にのぞむよう、また、2で述べるように本校児童の国語科における学力向上を目指し『主体的対話的に学ぶ子どもの育成』という研究主題を設定した。

副題についても2で述べるように、教員の語彙指導力の向上に取り組みたいことから、令和3年度は「語彙力をつけ、読む力を伸ばすために」、4年度は「語彙力をつけ、目的を意識した読む力を伸ばすために」、そして今年度は、学習指導要領の「語彙を豊かにする指導の改善・充実」を受け、副題を「語彙を豊かにし、読み取る力の向上を目指して」と設定して、授業研究会や研修会を行うことでその指導法を工夫し、実践を進めることとした。

## 2. 研究の趣旨

本校では、「笑顔で あいさつのできる子どもを育てる」を学校教育目標とし、目指す子ども像を「希望を持ち、心身ともに健康でたくましく生きる子」「自ら学び、自ら考え、進んで問題を解決できる子」「感謝の心を大切にし、思いやりの心で行動できる子」としてその育成に努めている。

令和元年度に全国学力・学習状況調査結果の分析を行ったところ、喫緊の解決すべき課題として、国語科の漢字を書く力や語彙力が低いことから言語能力の向上に向けた取り組みや校内組織の確立が必要であると考え、令和2年度に校長が言語力向上のための学校改善プランを作成した。このプランを研究部中心に全教職員全体で共有し、大学教授を招いて、効果検証授業を実施した。加えて、語彙指導の専門的な観点を高めるために、研修会を実施し、大学教授から学んだ語彙指導力の向上に取り組んできた。

また、大阪市小学校学力経年調査においても国語科の点数が大阪市の平均と比べて低い結果が続いてきた。経年調査も結果を分析し苦手な領域を明らかにし、児童の実態から考えてどんな力を伸ばしたいかを検討した。

○音読活動を工夫し、音読の楽しさを味わわせることによって読む力を付ける。

○文章を読み取る力を付けるために、線やマークを付けることを習慣化する。

○わからない言葉は、一人1冊の国語辞典を使って調べる。

○漢字を間違えずに正しく書いたり視写を行ったりする。

○自分の考えを書けるようにする。

○2～4人で話したり、クラス全体の場で話したりする機会を作り、自分の考えを広げたり深めたりする。

○読書量を増やす。

検討の結果、令和3年度に国語科を研究教科とし、特に研究領域として「読むこと」について取り上げ、語彙力を付けることができるようにしていくことに決めた。

### 3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

#### 視点① 基礎的・基本的な力を高めるための活動の工夫

音読の仕方を一斉読み、リレー読み、交代読み、役割読みなど教材内容や児童の実態に合わせて形態を工夫する。

また「国語辞典で読む力 UP プロジェクト」と名付け3年生から6年生には、一人に1冊国語辞典を持たせ、いつでもわからない語句の意味を調べることができるようにする。

#### 視点② 叙述を基に自分の考えをもつための工夫

児童に自分の考えをもたせる際には、必ず根拠となる叙述に線を引いてからもたせる。

また、単元や児童の実態に合わせて、ワークシートを工夫したり、動作化を取り入れたりする。

#### 視点③ 対話を通して自分の考えを伝え合い共有する場の工夫

ハンドサインを活用することで発表が苦手な児童も自分の考えを表すことができるようにする。グー（同じ意見）、チョキ（付け足し）、パー（違う意見）以外に、1年目の研究の成果により低学年のみ共有する場の工夫として、グッド（その意見もいいね）を付け足す。

また、話型の活用を今年度の大きな課題とし、昨年度までは交流の場面で発表した後にハンドサインを出して意思表示をするだけで終わっていたところを、さらに考えを深めさせるために、感想や意見、質問などを伝え合う活動を取り入れる。

### 4. 研究の成果と今後の課題

#### （1）研究の成果

##### ①基礎的・基本的な力を高めるための活動の工夫

- 一人読み、一斉読み、グループ読みなど、単元に合った音読の読み方を工夫することで正確な読みをすることができた。
- 音読を行う前に、単元のめあてを伝えておくことで、読み取る内容を考えながら読むことができた。
- 一斉読みをすることで、言葉を文章で捉えることが苦手だった児童も友だちの読みを聞きながら読むことができ、文章として捉えやすくなった。

##### ②叙述を基に自分の考えをもつための工夫

- 自分の考えをもつときに、考えの根拠となる叙述に線を引いて捉えることで、本文を基にしたそれぞれの考えを書くことができた。
- 2つの物の比較や登場人物が多数出てくる場合は、叙述に線を引く際に色分けをしたため、内容を視覚的に捉えやすくなった。
- 2つの物の比較を行う場合は、ワークシートと板書の工夫を行った。どちらにも2つの教材文を並べることで視覚的に比較がしやすく、自分の考えをもつときも考えやすかった。
- 「ジグソー法」「脳内ウォッチ」などの思考ツールを使用することで、自分の考えをもつことが苦手な児童も考えやすくなった。

### ③対話を通して自分の考えを伝え合い共有する場の工夫

- 自分の考えを交流する場面では、グループで話し合った後に全体で行ったことで、自分の意見を発表する場も増え、自信をもって発表することができた。
- 交流をグループと全体で行うことにより、自分の意見と友だちの意見を比較したり認め合ったりすることで、考えを深めることができた。
- 自分の考えとその根拠となる叙述が書き込めるようにワークシートの工夫を行った。ワークシートがそのまま話型になるようにしていたため、考えと根拠を同時に発表することができた。
- 「発表するときの話型」「聞いているときの話型」の2つを使用して、発表するだけで終わらないようにした。聞いている児童は、ハンドサインをするだけでなく、自分の考えとの比較や友だちの考えを認める言葉で返すことができ、考えを深めることができた。
- 「発表するときの話型」「聞いているときの話型」は、学年や単元によって使用する内容を精査して使用した。児童に合ったものを使用することで、無理なく使うことができていた。
- 全体交流の場では、学年によっては指導者主導で行うのではなく、児童だけで進められるようにした。「全体交流の進め方」を提示することで、ハンドサインを見ながら、同じ意見、違う意見を確認しながら進めることができた。

### (2) 今後の課題

- 音読するときに正確に読めていなかった児童に、指で押さえて読むなどを継続して指導していく必要がある。
- 自分の考えを含めて音読で表現するときに、音読の苦手な児童は、登場人物の気持ちを音読で表現するのが難しかったため、音読の苦手な児童には個別指導が必要である。
- ワークシートは、児童が書きやすいように考える観点を絞ったワークシートを使用した。しかし、観点が多すぎて書き辛くなることがあったため、観点を精査する必要がある。
- 「聞いているときの話型」を使用したのが、友だちの意見を忘れてしまって、聞き直すことが多かった。友だちの意見をメモしたり、覚えておいたりする練習などが必要である。
- 自分の考えの他に友だちの考えがよいと思ったときは、書き足してよいとしている場面があったが、友だちの考えを書く児童が少なかった。話を聞くとときにメモを取るなどの練習が必要である。
- 本文の読み取りをするときに、登場人物で色分けをして線を引く活動があった。線を引く箇所が多すぎて確認に時間がかかってしまったため、別時間で行ったり線を引く本数を絞ったりするなどの工夫が必要である。
- 本文を読む際に範囲を指導者が絞っていた。内容によっては、範囲が狭すぎて、自分の考えを書き辛い児童もいた。そのため、音読の範囲以外から自分の考えをもっともよいことを伝える必要がある。
- 「聞いているときの話型」は国語科だけでなく、他教科でも使用していかないとなかなか定着していかない。